

<書評と紹介> 中村理香著『アジア系アメリカと戦争記憶：原爆・「慰安婦」・強制収容』

金, 富子 / KIM, Puja

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

731・732

(開始ページ / Start Page)

94

(終了ページ / End Page)

98

(発行年 / Year)

2019-10-01

中村理香著

『アジア系アメリカと戦争記憶』

——原爆・「慰安婦」・強制収容』



評者：金富子

周知のように、1991年に韓国の金学順の告発によって始まった日本軍「慰安婦」問題解決運動は、加害国日本のみならず、国連を含めたグローバルなイシューとして広がり、その波は米国にも及んだ。米国にはコリア系移民が数多く住み、「慰安婦」碑の建立も含めて運動の一翼を担ってきた。また日系人のなかにはマイク・ホンダ下院議員のように、解決に尽力した人々も少なくない。北米では1970年代から戦時の日系人強制収容に対する戦後補償運動がおり、1980年代後半に日系人たちが米国及びカナダ政府から、不正を正すの意をもつ「リドレス」を勝ち取ってきた歴史があった。

しかし、こうした戦争被害に対する北米アジア系の多彩な声が日本に紹介されることは、一部を除いてあまりなかった。本書は、原爆投下、日本軍「慰安婦」制度、日系人強制収容を中心とする戦争暴力の被害者の側に立つ「アジア」を出自とした北米移民たち——研究者・政治家・運動家・市民・小説家——が太平洋横断的な戦争記憶（43頁）をどのように表象したのかについて、その多様性や複雑性、可能性と限界を比較検証したものである。

1 本書の構成と概要

まず、本書の構成は次の通りである。

序章 二つの戦争展と被害／加害の記憶

第1部 アジア系アメリカと「慰安婦」言説——「日米二つの帝国」という語り

第1章 アメリカで日本軍「慰安婦」問題を言説化すること——「特集号」の問いかけ

第2章 二つのリドレス——マイク・ホンダとアメリカの正義の限界

第3章 (不)在を映し出す場としての在米「慰安婦」追悼碑

第2部 複数の暴力と連結が開く可能性——日系とコリア系北米作家の描く「祖国の戦争」

第4章 「二つの帝国」と「脱出・救済物語」の領有／攪乱——ノラ・オッジャ・ケラーの『慰安婦』

第5章 「加害者の物語」——チャンネ・リーの『最後の場所で』が示す「慰安婦」像と「正しくない被害者」の心的損傷

第6章 国家記憶の統合／断絶としての人種暴力——ジョイ・コガワの『おばさん』における長崎・強制収容・先住民

第7章 祖国の惨苦を聞くということ——ノラ・オッジャ・ケラーの『慰安婦』が描く母の戦争と追悼という語り

次に、概要をみよう。序章では、右翼の抗議をうけ中止圧力にさらされた東京のニコンサロン「慰安婦」写真展（2012年）、米国で在郷軍人会などの介入で大幅縮小を余儀なくされたスミソニアン博物館の原爆展（1995年）という二つの事例をとりあげ、中止圧力をかけた日・米の保守派の発言が自国の被害への固執と加害の徹底的な否認という点で「合わせ鏡」のような類似的思想だと指摘し、こうしたいびつな自画像に向き合い、「被害への共感」と「加害の省察」という二つの視点から連結の回路を探ることが

本書の提起だとする。

そのうえで著者は、「原爆投下」と「慰安婦」制度、あるいは「日系人強制収容」と「慰安婦」制度という異なる歴史的背景をもつ「複数の暴力を語る」ことは相互免責の危険性を伴うが、これを自覚しつつ、あえて「自国の被害と加害」を「同時並行的に語る」ことが一面的な被害者あるいは加害者という自己認識を再考するのに有効に作用する可能性を探るため、次のように北米アジア系の人々の戦争被害への反応を省察する。

第1部では、朝鮮人女性を対象とした日本軍「慰安婦」制度への「アジア系アメリカ」の応答に関して、「アジア系アメリカ学会誌」(JAAS)の特集号「韓国・朝鮮人「慰安婦」をめぐる」(2003年、以下特集号)、日系米国人元下院議員のマイク・ホンダ、在米コリア系を中心に米国で建立された「慰安婦」追悼碑への在米日本人・日系人の事例をとりあげる。

特集号(1章)は、ポストコロニアル理論や欧米フェミニズム批判の洗礼をうけ米国マイノリティ研究に従事した第一世代のコリア系2人と日系1人の研究者が、1990年代以降の米国アジア系「慰安婦」言説のありようを批判的に検証したものであるが、著者はこの「日本の戦争犯罪のアメリカ化」の言説的過程を、日系人戦後補償に代表されるアメリカの正義ではなく、「日米二つの帝国主義」という批判的な視座から捉えようとしたと高く評価した。

2章では、日系人強制収容のサバイバーであり、対日「慰安婦」決議を推進したマイク・ホンダ議員に焦点をあてる。彼が、日系人としてはリドレスを勝ち取った「市民的自由法」にみられる米国の「揺るぎない謝罪」と対比させ日本の「不完全な謝罪」を強調することで米国の道義的優位を称揚した一方、国会議員としては進行中の米国の軍事加害行動に沈黙を守ったと

いう正義の限界を浮き彫りにした。著者は、こうした二重性を乗り越える可能性を、米国マイノリティの軍事行為の犠牲者へのトランスナショナルな連結の試みのなかに見出した。

3章では、米国に立つ「慰安婦」碑の設置に対し、否認／支持以外の在米日本人や日系人の複雑な反応を考察した。日本の戦争加害を擁護しないが日系人への偏見や人種暴力として跳ね返ることへの危惧、日系人が北米で生き残る過程で内在化させた「反日感情」に基づき日本の戦争犯罪を他者化して批判する姿勢への懸念、他国(日本)の帝国主義的軍事性暴力は批判するのに自国(カナダ)の先住民女性への植民地主義的「人権侵害」に触れないことへの異論などだ。また、公の場での碑のあり方として、「慰安婦」制度という他国の戦争被害を記憶する行為が米国の軍事(性)暴力の抹消とセットになっていることを指摘し、碑を対話の場とするために碑への異論や批判に耳を傾け、自己を振り返る努力を提言する。

第2部では、北米という「非当事者第三国」である「移民先母国」で刊行された「^{アジア}祖国の戦争」に関する三つのアジア系の小説——在米コリア系作家ノラ・オッチャ・ケラー『慰安婦』(1997年)、在米コリア系作家チャンネ・リー『最後の場所で』(1999年)、在カナダ日系作家ジョイ・コガワ『おばさん』(1981年)——を並立的に読むことで、これらに刻まれた「アジアの戦争」がもつ被害と加害という多面的な戦争記憶への読み解きを試みた。

前半の4章・5章は対になっている。まず、『慰安婦』(4章)では、日本軍「慰安婦」の「アキコ」がのちに夫となる白人米国人宣教師に救出され米国に渡るというありきたりな「救済物語」にみえながら、新たな支配の場として「国家・家庭」を書くことで「慈悲深い第三世界の解放者」アメリカ国家の自己表象への疑義と、

軍隊性奴隷制度／婚姻制度の表裏一体性を可視化した、と評価する。

次に、『最後の場所で』（5章）は、植民地期の朝鮮人「自発的対日協力者」でいまは米国に移民したハタを主人公に、惨殺された「慰安婦」「K」の身代わりに韓国から迎えた養女サニーを通じて「日米二つの軍事帝国」による性の支配を描く物語だ。サニーは在韓黒人米兵と韓国人女性間に生まれたため、米国内で非抑圧側の黒人米兵が韓国では性搾取側に回るという米国マイノリティの二重性も示唆し、「重層的視点から帝国のマイノリティ体験の戦争体験を言説化しようとする努力」（203頁）と評価する。しかし、ハタの回想の「慰安婦」表象では「K」が民族的純潔性を象徴するファンタジーとして描かれる一方、生き残った女性らの被害は周縁化された問題点も指摘する。著者は「協力者」のような名乗り出が難しい記憶を言語化したこの小説を「きわめて重要」と高く評価した。

後半の6章・7章もセットだ。日系人強制収容と長崎への原爆投下を結びつけて描いた『おばさん』（6章）では、日系人強制収容という人種暴力に対し「カナダ国民」としての市民権を盾に戦後補償を求め、そのため日本という出自を否定する叔母でリドレス活動家エミリーが登場し、小説の最後に「長崎で被爆した母」が開示される。先住民ゆかりの地での母の供養を通じて長崎への原爆投下とカナダ先住民への植民地主義的人種暴力を連結させ、カナダという国家が後者への暴力のうえに成立した事実が示唆されるとする。著者は、リドレス運動というマイノリティによる国家への希求が描かれる一方、「被爆した母」を通じて同質的な国家記憶に統合されない「脱ナショナル」な記憶を呼び起こしたと読み解く。

7章では、『おばさん』との対比で前述の『慰安婦』を再論し、二つの小説が示す母の被害

（被爆者／「慰安婦」）を北米アジア系の娘が語るという「代理表象」としての言説行為の両義性を検証する。両者は、北米オリエンタリズムが産出した「怪物的アジア人の母」の書き直しとしての「母の再表象」である一方、「女性化され人種的刻印を付された母国」の体現に陥る危険性を指摘する。

2 成果と疑問

評者は、第1部第1章の論考や第2部の当該小説を読んでいないことを断りつつ、以下成果と疑問を述べていきたい。

まず、評価すべきは、「複数の暴力を同時並行的に語る」という著者の問題意識と方法論だ。このうち著者が重視するのは、「自国の加害行為」（29頁、傍点ママ）への向き合いにあるのは明らかだ。「被害者」という「固定化された視点やそこから生じる純潔主義的思考」、つまり「被害を語ることの権力性」（29頁）に陥らないため、「加害者」という自己認識をもつこと、具体的には「被害体験にまつわる言説を、「加害者」という位置から見つめ直す」（29頁）ことの可能性を北米アジア系の戦争記憶表象から探っている（ただし論拠に、実証性が疑われている朴裕河の著作をとりあげるのはいかがなものか）。

1990年代の日本では、「慰安婦」制度への日本軍の関与を認めた「河野談話」（1993年）、「植民地支配と侵略」への反省とお詫びを含む「村山談話」（1995年）が公式に表明された。両者は日本政府が「加害者」としての自己認識を国内外に表明したものだ。しかしその後30年間、歴史修正主義者たちによる「慰安婦」バッシングや嫌韓ヘイトスピーチが日本社会を席卷し、メディアや一般市民にも広がった。「戦後70年安倍談話」（2015年）は、両談話を上書きして自己認識のなかの「加害者」を消し去り、

「被害者」に収斂しようとしたからだ。

この「同じ時代」である1990年代以降、北米アジア系の「同じ戦争」に対する記憶がどのように被害／加害という重層的な自己認識をもっていたか、あるいはもちえなかったのか、その可能性と限界を検証しようとした本書は、日本社会の過去と現状への鋭い問題提起になっている。

第二に、こうした自覚的な方法論に基づき、非当事国の北米で、アジア系の研究者・政治家・運動家・市民らの研究や言動(第1部)、3人の小説家による作品(第2部)に関して、日本の戦後補償運動もふまえて幅広く比較検証するとともに、こうした反応が出てきた北米社会の歴史的文脈を丁寧に示したことである。

日本軍「慰安婦」問題が1990年代の米国で関心事になったのは、それ以前の公民権運動や女性運動の進展がもたらした人種やジェンダーをめぐる人権意識の向上を背景に、アカデミズムで「人種・階級・帝国主義とジェンダーの交差」がキーワード化したこと、また冷戦の終結、第二次世界大戦終結50周年をきっかけに日本の戦争犯罪への関心が高まったこと、しかもこの過程はマイノリティの国家参与の形態として同化主義から多文化主義が主流になる過程であり、アジア系が社会的・経済的に地位が向上したことなどが随所で示され、北米の事情をよく知らない者にも理解しやすいものになっている。

そのうえで評者にとっては、第1部1章で研究者たちが、自己サルタン化(研究者が弱者と自己同一化することで学究的権力を得る)構造への自戒、コリア系にありがちな被害当事者と過剰な一体化がまねく他者(被害者)の体験領有の危険性への自省、「日本の戦争犯罪のアメリカ化」の可能性と陥穽が語られたのが興味深かった。

以上のように評者は多くを学んだが、疑問も

なくはない。まず、著者が「自国の加害行為」という時の「自国」のあいまいさである。それ以外に「母国」「祖国」などが出てくるが、読者にはわかりにくい。

たとえば、チャンネ・リー『最後の場所で』が描く被害は朝鮮人「慰安婦」であり、加害は朝鮮人対日協力者なので、同じ朝鮮民族内部の被害と加害であり、さらに養女サニーを通じて「日米二つの軍事帝国」による性の支配が描かれた(5章)。一方、在カナダ日系作家ジョイ・コガワ『おばさん』が描く被害はカナダでの日系人強制収容と米国の原爆投下による被曝であり、加害はカナダの先住民族への植民地主義的暴力が示唆されるが、日本という「自国の」加害は出てこない(6章)。著者が「原爆投下という日本の被害体験にまつわる言説を、「加害者」という位置から見つめ直す」(29頁)という時の「加害者」とは誰なのか。『おばさん』では日本(人)の被害は示されるが、日本(人)の加害は示されていない。強制収容は日本の戦争加害を日系人が不当にも引き受けさせられた連結の結果だが、その起源となった日本の加害が小説ではどう描かれ、また描かれなかったのか、よくわからなかった。

次に、日系とコリア系において、戦時の加害と被害の関係性は同じなのだろうか。たとえば、侵略側である日本の場合には「加害のなかの被害」だが、被侵略側である朝鮮の場合には「被害のなかの加害」であり、構造的には後者は前者によって引き起こされたものだ。したがって、両者を比較検討する前提それ自体が問われなければならないのではないだろうか。

なお、本書の随所で日本の戦後補償運動が参照され有益だが、本来ならば著者の問題意識に近いと思われる、加害国日本で自国の加害に取り組んだ「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」(2000年)の事例が参照されていないの

はなぜだろうか。残念に思った。

また、本書の問題提起に関連する試みとして、韓国でも「慰安婦」問題解決運動をしてきた女性運動がベトナム戦争における韓国軍の性暴力加害に取り組み、〈平和の少女像〉(「慰安婦」像)をつくった彫刻家夫婦がベトナム戦争の韓国の加害を問うピエタ像を彫像し、対日協力者(親日派)の研究をしてきた民族問題研究所が植民地主義の清算と東アジアの平和をめざして被害・抗日・親日(民族内加害)を展示する植民地歴史博物館を開館したことなども付け加えたい。

本書の結びで、「他者の理解と表象において、

自らの理想に合致しない当事者とどう向き合うのかという困難な問い」(傍点ママ)を「日米の戦争暴力の犠牲者やサバイバーに対する正義とどう結びつけていくのか」と問いかけたが、これに大いに共感するとともに、日本で本書が広く読まれ、こうした研究や取り組みが広がることを願っている。

(中村理香著『アジア系アメリカと戦争記憶——原爆・「慰安婦」・強制収容』青弓社, 2017年7月, 327頁, 定価3,000円+税)

(きむ・ぶじゃ 東京外国語大学大学院
総合国際学研究院教授)



有斐閣 出版案内

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel.03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/
(表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。)

◎図書目録呈◎

社会運動の社会学

大畑裕嗣・成 元哲・道場親信・樋口直人編 社会運動という人々の営みを理解するためのツールとして、理論や概念を学生の身近なテーマにひきつけてわかりやすく解説する斬新なテキスト。社会を駆動する運動のダイナミックな力に着目する、社会運動の視点からの現代社会論。

〔有斐閣選書〕
二五〇〇円

雇用システム論

佐口和郎著 ICTの展開で雇用の枠外の働き方が現実になりつつある。日本の雇用のメカニズムがいかに実現され、変容しつつあるかを示す。

A5判
二五〇〇円

生活保護と貧困対策

岩永理恵・卯月由佳・木下武徳著 ●その可能性と未来を拓く 貧困や生活保護をめぐる誤解を解きほぐし、難解な制度を知るだけでなく、よりよい制度・社会の構築へと議論をつなげる入門書。

〔有斐閣ヘトウテイ〕
一八〇〇円

生活と運動

淡路剛久・川本隆史・植田和弘・長谷川公一編 環境や環境問題が人間の生活にどう関わるのか 重要論稿を体系的に精選し編集問題を付す。

〔リネインクス環境 第3巻〕
四二〇〇円

地域から考える環境と経済

八木信二・関 耕平著 ●アクティブな環境経済学入門 環境問題は地域の問題——私たちの身近な地域から学ぶ環境経済学入門。

〔有斐閣ストロウティ〕
一九〇〇円

最低生活保障の実証分析

山田篤裕・駒村康平・四方理人・田中聡一郎・丸山 桂著 ●生活保護制度の課題と将来構想 生活保護制度を中心とする日本の最低生活保障の現状と政策変更の影響を、独自の調査を含む大規模データに基づき分析。

A5判
二九〇〇円

知りたくなる韓国

新城道彦・浅羽祐樹・金香男・春木育美著 韓国がどのような来歴をもち、国としてどのような舵を切り、そして世間のふつうの人びとはどのように暮らし、どんな問題を抱えているのか。まず手に取ってほしい、はじめの1冊。

四六判 一八〇〇円

